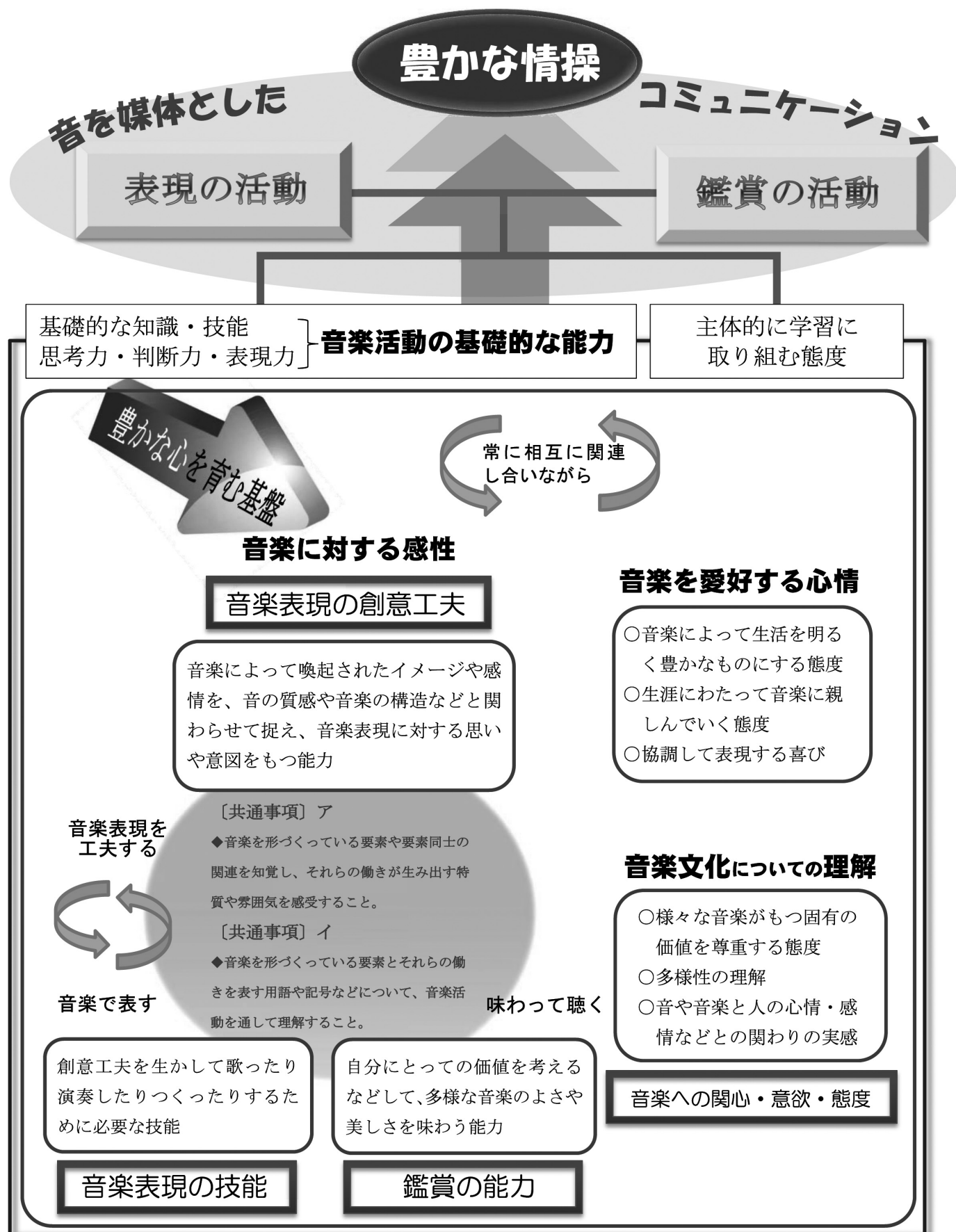


音 楽 科

音楽科の本質



音楽科の本質

中学校学習指導要領の音楽科の目標に「感性を豊かにし、(中略)豊かな情操を養う」とあるように、音楽科は情操教育に大きく関わっている教科である。

情操：美しいものや優れたものに接して感動する、情感豊かな心。情緒などに比べて更に複雑な感情。

豊かな人間性を育むためには、理性的な判断力や合理的な精神だけではなく、美しいものに感動するといった柔らかな感性が必要である。歌唱、器楽、創作の表現活動や鑑賞活動を通して、「生きる力」の中でもとりわけ「豊かな心」を育成していくことに、音楽教育の意味と目的があるといえる。

「豊かな心」を育む基盤となってくるのが「音楽に対する感性」である。「音楽に対する感性」とは、音や音楽のよさや美しさなどの質的な世界を価値あるものとして感じ取るときの心の働きを意味している。音や音楽を知覚し感受するときに、生徒の音楽に対する感性が働くことから、音楽表現を工夫する、音楽で表す、味わって聴くすべての音楽活動の支えとして〔共通事項〕が位置付けられている。表現活動では音楽で表すことと音楽表現を工夫することを往還しながら、感性を豊かにしていくことになる。

音楽科で付けるべき力

学力の三要素のうち、音楽科では基礎的な知識・技能と思考力・判断力・表現力等をまとめて音楽活動の基礎的な能力としている。左図では音楽活動の基礎的な能力、主体的に学習に取り組む態度と付けたい力の関係性について縦列で対応させて図示した。

これらの力を国立教育政策研究所がまとめた「21世紀に求められる資質・能力」に当てはめて考えてみると、創意工夫を生かして音楽表現するために必要な技能、すなわち「音楽表現の技能」が「基礎力」に当たる。左図では明記していないが、「歌詞の内容、楽曲の成立背景、作詞者や作曲者、我が国や郷土の音楽文化、生活の中の音や音楽の働き等に関する知識と曲想との関わり方の理解」、「発声、器楽の発音の仕方や奏法に関する知識」、「音楽的な特徴や楽曲の構造と曲想との関わり方の理解」等も基礎的な知識として背景には存在している。それらの知識・技能を使い、さらに深く考えていく「思考力」の部分は、「音楽表現の創意工夫」と「鑑賞の能力」の部分で示した力である。

「実践力」の中には、自律的活動や関係形成が含まれている。これらを音楽科で付けたい力で考えてみると、音楽を愛好する心情の中に含まれる資質はまさに自律的活動につながるといえよう。また、音を媒体として他者（友人だけではなく、作曲者や演奏者も該当する）とコミュニケーションを図っていくことが音楽活動であることを考えると、関心・意欲・態度をはじめとした情意に関する資質が、音楽科における「実践力」であるといえる。

音楽科の本質に迫る授業づくり

前述の通り、感性を豊かにしたり情操を養ったりしていくためには、音や音楽によって生徒の心が動く瞬間を授業の中でどう仕組んでいくかが重要となってくる。歌を歌うこと、楽器を演奏すること、音楽をつくることによって心が動き、また音楽を聴くことによって心が動く、つまりは「感動」に近い感情が生まれるような授業を目指していきたい。表現の活動では、だんだんできるようになる実感を伴わせたり、自分の思いや意図がだんだん音楽表現となっていく実感を伴わせたりすることが、感動体験につながっていき、鑑賞の活動では、鑑賞曲を聴いてよさや美しさを感じながら、自分なりの価値の創造をしていったり、他者と事実の共有や感受の共感をすることで価値を認め合ったりすることが、感動体験につながっていくのではないかと考える。

生徒の心が動かなくても、音楽の活動は成立する。例えば、「ひたすらパート練習に取り組んでいる」「示された条件にしたがって、音符を並べている」「じっと黙って音楽を聴いている」などがそれである。もちろん授業のある一場面において、このような生徒の姿が見られることはあるし、そのような活動が必要な場合もある。しかしそれでは本質に迫った授業とは言い難い。生徒自身が本時や題材の学習を終えた時に、“何を学んだか”“学んだことを今後はどう生かすことができるか”が実感できるような授業を目指し、実態に即した題材設定や学習課題の工夫、発問の工夫等に焦点を当てながら、授業研究を進めていきたい。

豊かな情操を養うための音楽活動の在り方 ～深まりのある音楽表現を目指した授業の構築～

I はじめに

本校音楽科では、平成23年度から4年間、音楽的な感受を支えとし、思考力・判断力・表現力を育むために言語活動を充実させた学習指導の在り方について研究を進めてきた。その中で、拡散的思考や収束的思考を意識した学習活動や学習形態の工夫等によって言語活動の質の高まりが見られ、知覚・感受したことを、音楽用語を用いながら根拠をもって説明したり批評したりすることのできる生徒や、「このように表現したい」という思いを明確にもちながら表現活動に取り組む生徒が増えてきた。

研究を進めていく中で、言語活動はあくまで手段であってそれが目的となつてはならず、その題材でどのような力を高めたいのかについて考えることや、学習を終えたときの生徒の姿を想像することの重要性に改めて気付くことができた。授業のゴールイメージを大切にもち、「その題材で何を教えたいか」や「その題材が適切であるか」などを判断しながら授業を構築していくことが大切であることが見えてきた。そして音楽科では、どのように表現したいかやその音楽が自分にとってどのような価値があるかを考えたり、多様な音楽のよさなどを考えたりするために言語活動を取り入れ、言葉で表した思いや意図を音楽で表していく学習過程が、豊かな情操を養うことにつながっていく。つまり、「音楽によって喚起されたイメージや感情を、音の質感や音楽の構造などと関わらせて捉え、思考・判断して表現および鑑賞すること」が音楽科の本質であると考え、研究仮説を以下のよう設定した。

ー研究仮説ー

思いや意図をもって音楽を表現していく過程において、〔共通事項〕と関連付けた問いかけを行っていくことで、より深まりのある音楽表現へとつながるであろう。

全ての音楽は音楽を形づくっている要素の総体であり、

様々な音楽を形づくっている要素の働きが関連し合って、その音楽固有の特質や雰囲気を生み出している。生徒が出会った新たな音楽を表現していく中で、その音楽の特徴や楽曲の構造と曲想との関わりを理解し、その音楽を表現するために必要な技能をどう使いながら表現していくかを考えていくことが、音楽表現において創意工夫をしていくことである。

この仮説を踏まえ行った実践を報告する。

II 実践事例

第2学年【A 表現】歌唱ア、器楽ア、イの実践

1 題材名

歌と箏の特徴を生かし、日本の歌を表現しよう

教材 歌曲「夏の思い出」

江間 章子 作詞、中田 喜直 作曲

箏曲「さくらさくら」古謡、作者不詳

箏曲「夏の思い出」

作詞・作曲 同上、眼龍 義治 編曲

〔共通事項〕音色（声や箏の音色）、旋律（旋律線のものつ方向性）、強弱（強弱の様々な変化）等

2 音楽科の本質と本実践の関わり

本題材では、歌唱において、「第3フレーズが、他の部分と大きく違うところはどこか」や「なぜ作曲者は“さいている”の部分でppにしたのか」、器楽では「なぜそのような工夫を取り入れたのか」、「その工夫を入れることでどういった効果が生まれるだろうか」といった問いかけを投げかけていくことで、生徒が自らの感性や創造性を発揮しながら、自分にとって価値ある新しい表現をつくり出すことにつながっていくこととなると考え、実践を行った。

3 題材構成

次	主な学習内容	配時
第1次	○「夏の思い出」の歌詞の内容や曲想に関心をもつ。 ○「夏の思い出」の音楽を形づくっている要素の知覚・感受を深めるとともに、音楽の特徴と歌詞の内容を関わらせて歌う。	2
第2次	○箏の構造や調弦（音階）、姿勢や構え方などについて知る。 ○楽譜を見て「さくらさくら」を演奏する。	2
第3次	○箏曲「夏の思い出」を演奏する。 ○歌と箏の特徴の違いや共通点について考える。 ○箏の様々な奏法について知る。 ○曲にふさわしい音楽表現を追究して、思いや意図をもちながら表現に工夫を加えていく。 ○学級全体で発表会を行う。 ○箏で表現を工夫したことを踏まえて、もう一度「夏の思い出」を歌ってみる。	3

4 指導の実際（実践内容）

（1）本質を捉えた題材構成

「夏の思い出」は、16小節という短い曲の中で、作曲者によって多様な強弱の変化が設定された楽曲で、それと併せてフェルマータや歌詞の抑揚に合った旋律線の方向性、旋律の反復や変化、伴奏の変化等が関わり合うことによって、霧の中に見える水芭蕉の美しさ、遠い尾瀬に思いを馳せる情景や心情等を穏やかな曲調で表している楽曲である。この楽曲のもつ「日本の歌の美しさ」の価値に迫るために、器楽領域からもアプローチできないかと考え、箏を用いて表現することとした。「夏の思い出」の旋律線は順次進行が多く、他の共通教材と比べると箏での演奏も容易である。箏から生み出される音色や余韻は、日本的な情景と結び付きやすく、生徒がイメージする情景を表現しやすいと考えた。また、箏のもつ楽器の特徴を生かすと、歌曲である「夏の思い出」を箏で演奏する場合においても、自分の考えや思いを音楽で表現していく楽しさを味わえるのではないかと考えた。自分の声ではなく和楽器（箏）を用いて、「日本らしさ」を表現していくことで、新たな視点で日本の音楽のよさを感じ取り、理解する

ことができ、音楽に対する多様な価値観を認め、視野を広げるきっかけとなると考え、題材を構成した。

（2）題材によって生徒に付けさせたい力の整理

題材構成を踏まえ、第1次、第2次、第3次のそれぞれで、生徒に身に付けさせたい力の整理を行った。

第1次：歌唱による「夏の思い出」

○歌詞の内容や曲想を味わいながら、音楽を形づくっている諸要素の働きや関わりについて楽譜から読み解く力

第2次：箏による「さくらさくら」

○箏の構造や発音の仕組みの理解、箏の演奏の仕方に関する知識と、箏で音楽表現をするための基礎的な技能

第3次：箏による「夏の思い出」

○箏で表現する「夏の思い出」にふさわしい音楽表現を追究するために試行錯誤しながら、自らの思いや意図をもった表現を工夫する力

（3）教師による発問の精選

付けたい力の整理を行った上で、その付けたい力に合わせて発問の精選を行った。

第1次：歌唱による「夏の思い出」

二部形式の理解と（2）で記述した力に迫るために以下のような発問を投げかけた。

「第1フレーズと第2フレーズはメロディーが同じだけど、何かが変化していないかな？」

「伴奏の変化で、どのような感じ方の違いがあったかな。」

「第3フレーズはこれまでと大きく違う部分があるけど、それはどんなところだろう。」

「なぜ、作曲者は咲いているをppにしたのか、考えてみよう。」

「フェルマータには作曲者のどんな気持ちが込められているだろう。」

第3次：箏による「夏の思い出」

試行錯誤していく過程において、

「その部分にどんな工夫を入れることで、何を表現したいのか」

「なぜその工夫を取り入れたのか」

「その工夫を入れることで、どのような効果が生まれるだろうか」

このような問いかけを常に生徒に投げかけながら表現活動を行わせることで、生徒がどのような思いで工夫を入れたのかをメタ認知させながら、表現活動をするようにした。

(4) 声と箏の特徴の分類

歌唱と箏で表現する際、共通して工夫できることや箏独自の表現方法等について整理することで、それぞれの特性を生かした表現につながると考えた。

1. 歌と箏の特徴や共通してできることを考え、まとめてみよう。

歌の特徴	共通してできること	箏の特徴
フレーズをなめらかに つなげることが出来る (レガート・スラー・アクセント) 音域は広い ある程度同じ強さで のびることが出来る 1人1パートの音域が広い 1人1パートの強弱をつける 歌詞・言葉や表現 音程にブレがきくことも ホルタメント⑤	④ 強弱をつける (全体的に) 速度がつけられる ピッチがつけられる	フレーズは つなげられない (1拍1音) 出せる音域に 限りがある (2オクターブ) 2オクターブ以上の音を 同時に出来る (全音) 1音には強弱を つけられない 音のみの表現 一定の高さで安定して出せる ホルタメント⑤

この特徴の分類を整理した上で、箏での演奏でどのように工夫を加えていきたいかを考えさせた。

生徒の工夫例

- ・声は長くのびることができるけど、箏は音がすぐに消えていってしまう。歌っていた時のように箏でも演奏がしたいから、トレモロを入れて同じ音を連続して弾いてみよう。
- ・「さいている」の?は、箏ならではの余韻に加えて、ピッツィカートを入れ、さらに柔らかな音で表現してみよう。

(5) 演奏者と鑑賞者の視点を明確にした発表会

工夫したことを踏まえ、演奏を発表し合う場面では、演奏者と鑑賞者の視点を明確にしたペアによる発表会を行った。

- ①演奏者は予め工夫点を伝えるのではなく、工夫したことが鑑賞者に伝わるように演奏を行う。
- ②鑑賞者は、演奏者がどこを工夫して、何を表現しようとしていたのかを予想し、相手に伝える。
- ③演奏者は鑑賞者に、どのような工夫をしながら演奏をしていたか、なぜその工夫を加えたのかを鑑賞者に説明をする。
- ④鑑賞者は演奏者の思いを確認した上で、感想を述べてたりアドバイスをしたりする。

5 成果と課題**(1) 成果**

- ① 歌と箏で共通の教材を用いたことで、歌唱と器楽それぞれで表現できる表現方法や特徴を再認識することができた。また、歌唱の学習を行った後に箏での学習を行ったことで、歌唱で学んだことを箏での表現活動にも生かすことができた。

〈題材を終えた際の生徒の振り返りから〉

もともと歌で表現したことが箏でも表現できるのだなと思いました。自分自身の思いを表すのには、僕は箏が適していると思います。歌にはない箏の特徴、奏法や、歌では表しにくいことでも箏なら分かりやすく表せるからです。

例えばピッツィカート。歌で大切に歌う、柔らかく歌うと考えたら強弱くらいしか思いつきませんが、箏ならピッツィカートで分かりやすく、確実に、強弱だけでなく柔らかさや大切さを表現することができると思います。箏にも多くのよさがあることを学びました。

歌と箏では違った表現の仕方だけれども、「夏の思い出」を演奏するときは同じように優しい感じやおだやかな感じを表現することが大切だと思う。箏を用いると他の楽器にはないようなやわらかさが出せたり、色々な工夫で歌にはない要素で短所を補えたりできたと思った。

日本独特のおだやかなゆっくりとしたメロディーの表現に向いている、日本らしい楽器だった。

箏では、2つの音を同時に出したり色々な技法を使って音色をつくったりするなどいろいろな表現ができて、曲に取り入れて表現できました。「日本」という感じの音だったし楽しかったので、またやってみたいです。

箏でしかできない表現や歌でしかできない表現があったので、それぞれのよさを分かってうまく使えるようにしたいです。箏で情景を表す時、色々な奏法を使うのは難しいけれど、情景と合ったものを選んでやってみるのは楽しかったです。

- ② 歌と箏で共通して工夫できる表現方法や、箏独自の表現方法について整理したことは、箏で創意工夫していく上で、大きな手がかりとなった。箏でしか表現できない、奏法を中心とした表現方法による工夫を加えて表現する生徒の姿や、歌唱での学習を踏まえて、より歌唱した時の表現に近づけようとする生徒の姿が見られ、多様な表現を工夫していく姿を見ることができた。
- ③ これまで表現活動における発表会では、工夫した点を鑑賞者に伝えた上で、演奏させることがほとんどであった。今回あえて逆の方法を取り、演奏者と鑑賞者の立場をより明確にしたことで、演奏者は鑑賞者に自分の表現を伝えようと一生懸命に演奏し、鑑賞者は演奏者がどんな点を工夫したのかを注意深く聴く姿勢が見られ、意欲的な学習へとつながった。また、演奏者と鑑賞者の意見の交流場面では、〔共通事項〕に関連付けた発言が多く見られた。

〈生徒のワークシートの記入例〉

〈演奏者の視点から〉

- ・最後の「とおいそら」は、だんだんと空が遠くなっていく様子を表現するためにデクレシェンドをかけてみた。

〈鑑賞者の視点から〉

- ・A君は全体的に弱い音でなつかしい思い出の回想を表していた。また、最後のほうでビブラートを使い、より淡い感じを表現していたと思う。
- ・一段ごとの終わりが弱くなることで感情の波、出ては消える思い出を表現していた。思い出の柔らかさを、ピッツィカートを用いて第3フレーズで使用することで、幻想的な感じが出ている。

(2) 課題

- ① 器楽領域の学習に和楽器である箏を用いたことは、日本らしさや日本の音楽のよさを感じる視点からはよかったが、操作性という視点では課題が残るものとなった。箏は音を容易に出すことができるが強弱が付きにくく、豊かな強弱表現にはなかなか結び付きづらい楽器である。また、旋律線の方向性に着目し、音高が高くなっていく部分で生徒が強く演奏したいと思った際、箏では奥から手前に向けてクレシェンドをかけて弾かなければならず、手前から奥へと弾く箏の基本的な奏法と反することとなる。箏の向きを逆さにし、演奏者の手前側を一の弦にすることでクレシェンドをかけやすくする手立てもあったように思われる。器楽における楽器の扱い方にはまだまだ工夫の余地があり、生徒の実態をよく見極めてどのように使用するかについて熟考すべき点であることが判明した。
- ② 今回使用した箏の楽譜は、眼龍 義治による編曲のもので、強弱記号は一切書かれていなかった。生徒の表現の工夫の中には、歌唱楽譜に付けられた強弱とは逆の表現の工夫を考えた生徒もあり、そのような生徒をどう評価したらよいのかについては今後さらに検討していく必要がある。楽曲のもつ“普遍的なよさ”を重視し、作曲者の意図を適切に読み取り工夫をした場合と、作曲者の意図とは違った強弱等における表現方法の工夫を考えた場合では、何をねらいとし、生徒にどのような力を付けさせたいかによって、評価規準が変わってくる部分であるように思われる。ねらいや付けさせたい力と、その評価については、今後も研究を進めていかなければいけない。
- ③ 第3次の演奏者と鑑賞者の視点を明確にした発表会は、学級の実態や設定の仕方によっては大きなリスクを伴うものであることが判明した。演奏者が工夫した点が鑑賞者にうま

く伝わっていた場合には、表現できたことに対するうれしさや達成感を感じることができ
るが、鑑賞者からの答えが、演奏者自身が工夫したところと違っていた場合には、表現することを嫌だと感じ自信喪失する可能性が考えられる。そのような状況にならないよう、もしうまく伝わらなかった場合においても「頑張って鑑賞者に伝わるように練習したい」と演奏者が思えるメンタルを日々の授業において鍛えておくこと、スモールステップの中で失敗をする経験も積ませておくことや、も

しうまく伝わらなかった場合でも互いに認め合えるような授業の雰囲気づくりを日々の授業の中で積み重ねていくことが大切である。

【参考・引用文献】

- ・文部科学省『中学校学習指導要領（平成20年9月）解説－音楽編－』教育芸術社，2008年
- ・臼井 学「中学校音楽科が大切にしたいこと」富山県中学校教育課程研究大会（音楽部会）配付資料（平成27年10月）